

## 声 楽

## 國土潤一

2024年の本文冒頭に書いたコロナとインフルエンザの共存、ロシア・ウクライナ紛争、パレスチナ問題は、一向に解決の糸口さえ見えず、更には日本の政局の波乱、アメリカ大統領選の共和党トランプ氏勝利、年末の韓国大統領の突然の戒厳令発令、元日の能登大地震や異常な夏の暑さと長期化による様々な被害等々、政治・社会・自然の脅威に立ちすくむ1年であった。音楽はそんな憂き世を暫し忘れさせ、明日への希望を再び甦らせてくれはしないだろうか？この1年に聴いた演奏会から、心に残ったものを書き出してみよう。

2月13日東京オペラシティでの「B→C」での薬師寺典子は、能までも加えた現代音楽のスペシャリストとしての自負を感じさせる意欲的プログラム。新境地を開拓する者の宿命としての「実験」と「冒険」の試行錯誤が課題となるだけに、良いプレーンをも加えたピントの合った精進を期待したい。

サントリーホール・オペラ・アカデミーも30年を数える。3月22日と7月12日の発表を今年は久し振りに聴く。エグゼクティブ・ファカルティに名テノール、ジュゼッペ・サツバツティーニを迎えての指導体制ももう長い。その成果を感じつつも、受講生の理解度・対応能力の個人差を埋め、新国立劇場オペラ研修所や二期会、藤原歌劇団の研修とはまた違う成果を世に問うにはどうしたら良いのかを考えてみる必要はないだろうか？サントリーホールという母体が運営するこのアカデミーならではの教育・指導方法のより深い模索を期待したい。

新国立劇場オペラスタジオのサマー・リサイタルを7月25日に聴く。佐藤正浩が研修所長に替わっての2年目だ。佐藤体制はマルチリンガルなレパートリーを学ばせることでの成果を狙っているのだろう。アメリカ出身でウィーン国立歌劇場の音楽主任のキャスリーン・ケリーを指揮に据え、独・露・仏・英の4カ国語のマルチリンガルな選曲。外国語歌唱の習得のためには、それぞれの原語の歌唱のためのディクシオン指導（会話のためのディクシオンではなく、歌唱のためのそれ）が不可欠だが、今回ドイツ語が他の3言語に比べて数段劣るように聴き取れる。これは改善の必要があるだろう。日本の声楽教育自体に不足しているディクシオン教育の課題は、ここでも残されているかもしれない。

7月30日東京文化会館（小）で、今年も「新作歌曲の会」を聴く。24回を迎えたこの会が生み出した歌曲も180曲を超えたという。今回では特に鈴木静哉の「季節（立原道造・詩）」が心に残った。この会だけではなく、新作発表の演奏会は数多ある。歌曲だけではなく、音楽界全体で言えることだが、生み出された作品の中から後世に残すべき作品をチョイスし、それを優れた演奏で世に知らしめる作業も、これからは必須ではないだろうか？「生みっぱなし」の作品の何と多いことだろう！勿論、有り体に言えばその多くは忘れられても仕方ない作品ではある。今日我々が知っている多くの古典的名曲は、その他の忘れられていった楽曲の累々たる屍の上に生き残れた作品でもあるのだ。楽曲の屍の中にも忘れ去るには惜しまれる作品もかなりあったのは、この100年で顧みられ復活した作品が証明している。故・岩城宏之や故・若杉弘が自称した「初演魔」をもじって自らを「再演魔」と呼ぶ山田和樹ではないが、作品のアーカイブを持つそれぞれの団体が、まずそれを試みる時期に来ていると強く思う。勿論、作品に対する審美眼と再演に当たっての優れた演奏は必須であるが。

9月6日には東京文化会館（小）で「竹の会～竹村靖子傘寿記念」

を聴く。元桐朋学園大学特任教授であったソプラノの竹村靖子の門下生と所縁の歌手、ピアニストが集ってのコンサート。ひとつの門下生コンサートとしては、破格の工夫を凝らした盛り沢山の選曲とデコボコはあるものの一定の水準を保った演奏、そしてそのステージ姿に教育者としての竹村靖子の姿勢をも推察できる楽しい時間でもあった。

日本演奏連盟・新進演奏家育成プロジェクト・リサイタル・シリーズTOKYOでは、2024年は3人の声楽家が東京文化会館小ホールで自身の「今」を披露した。9月18日は、ソプラノの川辺茜。国立音大、同大学院、更にウィーン国立音大で学び、現在は秋田大学で教鞭を執る人財で、ライフワークの近現代作品を集めたもの。R.シュトラウス、新ウィーン楽派3人にバーバー、リーム、林光、ロイターという選曲にも主張が感じられる。極めてマニアックながら、術学趣味にならぬ歌の生命力は楽しい。10月16日はテノールの大平倍大。東京藝大で博士課程まで学び、更にウィーン国立音大で学んだ大平は、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、シューマンというドイツ系リリック・テノールの王道とも呼ぶべきプログラム。最近はむしろ珍しいほどの「ど直球のストライク」の選曲だ。小細工の効かない選曲を、大平は真摯な楽曲解釈とディクシオンの研磨で、誠実に編み上げた。ドラマティックな部分での声楽的課題は感じられたが、好感度の高い歌唱に拍手。年の瀬の12月27日には古楽集団「アントネッロ」でも活躍する東京藝大で大学院まで学んだソプラノの中山美紀。英・独・伊に日本語の4カ国の歌詞の作品を集め、レジュエロのコラトウーラの華麗な技と表現を聴かせた。名人芸的な技法を際立たせようと修練すると、歌手もアスリートになる。アスリートは記録や他者との勝負が目的だが、芸術家はちょっと違う。この自明の理を昨今のピアノの世界では見失っている指導者や奏者が多いのは常々残念に思っていたが、声楽においてもその傾向はないでもない。真の芸術家となるための指標を見失わぬことを願ってやまない。

10月22日には東京文化会館（小）で、ソプラノの長島剛子とピアノ梅本実のリート・デュオを聴く。19世紀末から20世紀前半のドイツ・リートをライフワークにしている2人は、音楽之友社から「新ウィーン楽派によるドイツ歌曲集」を監修した楽譜も出版されたが、今回は満を持してシェーンベルクの「月に憑かれたピエロ」を取り上げた。川島素晴指揮のアンサンブルが鮮やかに支えた。

外来演奏家の中でもひときわ忘れ難いのは、11月2日にサントリーホールで急遽行なわれたマティアス・ゲルネとマリア・ジョアン・ピリスによるシューベルトの「冬の旅」だ。ピリスの強い希望で実現したこの日本でのたった一夜限りの演奏で、ピリスは唯一無二のこの曲の世界を具現した。その鬼気迫るような精神世界に気圧されたゲルネの集中力が時に乱れる瞬間もあったが、正に名人同士の真剣勝負、一期一会の音楽空間は空前絶後の感銘を聴き手の心に残した。この稀有の瞬間に立ちあえた者は、「音楽する」という行為の真義を体感したに違いない。

## 國土潤一（こくど・じゅんいち）

昭和31年東京生まれ。東京芸術大学声楽科、同大学院修士課程修了後、旧西ドイツ国立デトモルト音楽大学に留学。声楽を伊藤亘行、川村英司、山路芳久、テオ・リンデンバウム、リヒャルト・ホルム、ドイツ語舞台発音法をハンス・クールマン、合唱指導法を田中信昭に師事。帰国後の1988年から演奏活動の他に、音楽評論を「レコード芸術」誌を出発点に開始し今日に至る。「歌の本」を2021年に音楽之友社より上梓する。